

あなたの街の  
ドクターが  
アドバイス



## がんの早期発見と生存率

**早期であれば、ほとんどのがんが  
10年生存率90%以上**

先月、全国32のがん専門病院でつくる「全国がん（成人病）センター協議会」が、がん患者の生存率データを公表しました。例えば、乳がんは、5年生存率88・7%に対し、10年生存率は80・4%へ低下します。乳がんは、生存率が比較的高いけれど、時間がたつてから再発する場合もあるといわれています。

一方、胃がんは5年生存率70・9%に対し、10年生存率69・0%、大腸がんは5年生存率72・1%に対し、10年生存率69・8%と、ほぼ横ばいの結果でした。これらのがんは、早期発見できれば内視鏡を用いた方法でがんを取り切ることができ、完治する治療法が確立されているからです。

胃がん検診は、バリウム検査と胃カメラ検査があります。バリウム検査は、胃粘膜の凹凸を見てがんの有無を判断しますが、早期がんだと粘膜に凹凸が現れない場合が多く、発見できないケースもあります。胃カメラは、微小な病変でも見つけることが可能な検査です。検査時間は通常3〜4分、ごく細いファイバーを鼻から入れる経鼻内視鏡という方法もあり、苦痛もたぶ軽減することができます。

大腸がん検診は、便の潜血反応で調べ、陽性が出れば大腸カメラの検査が必要です。ただし、陰性であっても、便秘や腹痛といった症状が顕著に現れているのであれば、一度カメラ検査を受けてみてください。なぜなら、便の潜血反応偽陰性率（がんの見逃し）は、進行がん10%、早期がん50%といわれるからです。

がんの進行度は、リンパ節や他の臓器への転移を基に病期（ステージ）で表しますが、早期がん（1期）であれば、ほとんどのがんで10年生存率は90%以上という高い結果です。早期がんは症状の出ないものもあり、だからこそ、早期発見のために定期的な検診が必要です。そして、何か気になる症状があれば、怖がらず直ちにその部位の専門医に相談することを強くおすすめします。

お話ししてくださいました先生



いし胃腸科内科  
院長  
**石 忠明** 先生

岩手医科大学卒。北海道大学  
病院を経て、2012年同院院長  
に就任。日本消化器病学会専  
門医、日本消化器内視鏡学会  
専門医